立教大学学術推進特別重点資金（立教ＳＦＲ）
個人研究費
２０１０年度研究成果報告書

	所属･職名	氏　名
研究代表者	法学部政治学科・助教	五野井 郁夫　　印
研究課題	グローバル・ジャスティス運動が国際規範形成に与えている影響に関する研究	
研究期間	２０１０　年 度	
研究経費	５００　　千円	

研究の概要（２００～３００字で記入、図・グラフは使用しないこと）

本研究の概要は、グローバル市民社会(Global Civil Society)を主体として、広範に社会正義を求めている近年のグローバル・ジャスティス運動(Global Justice Movement)が、世界政治において果たしている役割と可能性、そして限界を明らかにすることである。

とくに本研究では、グローバル市民社会という市民的な連帯をからなるグローバル・ジャスティス運動による国際規範形成の影響力と多様な性質を明らかにすべく、NGO・キリスト教を中心とした宗教組織･類縁集団(affinity group)ベースの市民組織による活動の双方から分析することを基本的な姿勢としている。

キーワード（研究内容をよく表しているものを３項目以内で記入。）

〔 グローバル市民社会 〕〔グローバル・ジャスティス〕〔　　国際規範　　〕

研究成果の概要（図･グラフ等は使用しないこと。）

1. 本研究の目的

一国内政治においては民主主義の形骸化として「ポスト・デモクラシー」状況(Crouch, 2004=クラウチ, 2008年)が指摘されるなか、1999年のシアトルにおける反WTO闘争を象徴的な転換点として、世界社会フォーラムなど世界中で顕在化しつつある近年のグローバル・ジャスティス運動という、国境を越えた直接民主主義的で市民的な機運が高まりつつある(N. Klein, 2002=クライン, 2009年; 遠藤誠治, 2006年; R. Reitan, 2007; J. Hadden and S. Tarrow, 2007; 土佐弘之, 2007年)。このような前提を受けて本研究では、宗教組織やNGOのように組織化されていない諸集団も含むグローバル市民社会を主体としたグローバル・ジャスティス運動が、国際社会のなかの各国家の選好に影響を与えることで国際規範形成が促され、それによって各国の国益が再定義され国際協調が可能になる過程を明らかにすることを目的としている。

2. これまでの研究状況の経緯

2.1 国際規範形成と規範変容的文化

本研究の着想に至った経緯として申請者は、これまでグローバル市民社会による国際規範形成について、貧困国の重債務救済を事例として、各先進国政府の政策決定者らやアドボカシーの担い手たる NGO 関係者への研究調査を行い、政府-NGO 間のアドボカシーと相互作用メカニズムを明らかにしてきた。

とくに海外と日本での G8 での成果も含めた調査研究ならびにそれらの結果の分析を行うことで、Jubilee2000 から Make Poverty History までの重債務救済キャンペーンの基底となった、市民らによる宗教運動や公共圏でのさまざまな社会運動やフェスティバル的な文化と芸術の役割について調査分析を重ねることによって、規範をめぐる社会運動についての理論、そして同理論と民主主義理論との接合に向けたさらなる洗練化の双方に取り組んできた。

2.2 類縁集団による国際規範変容

なかでも NGO を中心とした市民社会諸力のみならず、NGO のように組織化されていない類縁集団(affinity group)が規範変容的文化を通じて国際規範形成に与えた影響の実体を明らかにすることに成功している。

この類縁集団と規範変容的文化を結びつけ国内・国際・トランスナショナルな規範変容に注目した点は政治学・国際関係論分野では日本での研究がまだ僅少なことから、極めて重要であり意義深いものである。くわえて、海外でのフィールドワークの継続と市民らによるグローバルな「下からの」規範形成過程の場に引き続き参加することで知見を広げてきた。

2.3 グローバル・デモクラシーとグローバル・ジャスティス運動

これらフィールドワークの継続によって得た知見をもとに、グローバル・デモクラシーの実体と国際関係論における規範形成の理論とも接合させ、グローバル市民社会にくわえて、類縁集団を担い手とした DIY(Do It Yourself)的な規範変容的文化が重債務救済と規範変容に与えた影響についての動態把握にも成功した。このような研究が進展するにつれて、グローバル・デモクラシーとしての国際規範形成の一局面が、とくに 1990 年代以降現在までのグローバル・ジャスティス運動を形作っており、グローバル市民社会自体が政策担当者-NGO 間関係のみに回収されない、多様なアクター間の相互作用から成立していることを発見している。

研究成果の概要（つづき）

2.4　宗教勢力とグローバル・ジャスティス運動

したがって、現在までの規範変容的文化とグローバル・ジャスティス運動に注目しつつ研究を発展させるとともに、かつ本研究では従来の NGO のみに注目するグローバル市民社会研究では重視されてこなかったキリスト教界を中心とした宗教勢力や規範変容的文化にも注目している。これら宗教勢力を基底とした類縁集団(affinity group)からなるグローバル・ジャスティス運動による国際規範形成の側面に注目することで、グローバルに連携した人々が国際的な政策形成過程に関与する現象はなぜ可能なのか、その範囲とはどこまで及ぶのかを貧困国の債務救済をめぐる事例研究の分析から明らかにし、翻ってグローバル市民社会論に新たな理解を提起したい。

3.　本年度の研究成果

3.1　NGO・キリスト教界と社会正義

本年度は、グローバル市民社会論とグローバル・ジャスティス運動の理論と進展について、既存の NGO ならびにカトリック教会内部でのグローバル・ジャスティス運動の機運とメカニズムを把握すべく調査等を行い、多くの成果を上げた。

なかでも一次資料の収集と聞き取り調査を組み合わせたフィールド調査の対象として、本研究の特色の一つであるグローバル・ジャスティス運動の担い手たるグローバル市民社会としてのキリスト教界の動態を把握すべく、とくにローマ・カトリック教会による社会正義への取り組みを明らかにするために、本年度はヴァチカン市国のローマ法王庁にて、それらに中心的な役割を果たしたナイジェリア出身のフランシス・アリンゼ司教枢機卿(Cardinal Francis A. Arinze)をはじめ、教皇直属の評議会である開発援助促進評議会(Cor Unum)、正義と平和評議会、諸宗教対話評議会の各責任者ならびに担当者への調査と資料収集に成功した。

3.2　カトリック教会系組織による開発援助の系譜

とくにカトリックの宗教組織による国際規範形成と開発援助のメカニズムについて、その原点となったビアフラ紛争下での人道支援の背景から開発援助促進評議会、カリタス等を通じた現在までの重債務救済と人道支援への歴史的文脈を明らかにするとともに、既存の開発型 NGO が陥りがちだった運営資金問題を回避する知見を獲得したことの持つ意味は、非国家主体による国際規範形成の全体像を把握する上では極めて大きいと思われる。また、継続して英仏日で開発 NGO と類縁集団のフィールドワークを行うことで、NGO 側の同課題に関する進展状況も確認している。

3.3　今年度の研究成果公表と今後の課題

今年度は国際学会も含め 3 つの学会で報告を行う機会を得たとともに、グローバル・ジャスティス運動による国際規範形成の影響力と多様な性質をとらえつつ類縁集団とフラッシュモブによる政治への接続について理論化した論文と図書の刊行に成功し、研究計画以上の成果を上げた。くわえて、日本政治学会、社会思想史学会、平和学会等で討論者を行うとともに、上智大学グローバル・コンサーン研究所シンポジウムと CS 放送局朝日ニュースター「ニュースの深層」にて、公共性と類縁集団による規範変容的文化について報告する機会に恵まれた。

なお、第二ヴァチカン公会議を転換点として、それ以前と以後のキリスト教界における開発援助の潮流の把握につとめることで、それらとの関連で多くがキリスト教系である世界５大 NGO の開発援助活動の歴史について、その思想適基盤ならびに資金的基盤から再考することを今後の課題としたい。

研究発表（研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。）

①雑誌論文（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）
②図書（著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数）
③シンポジウム・公開講演会等の開催（会名、開催日、開催場所）
④その他（学会発表、研究報告書の印刷等）

① 雑誌論文

- 五野井郁夫 「シティズンシップとグローバルな倫理:当事者概念による歓待の政治をめぐって」、『平和研究』 36号、2011年、99-115頁
- 五野井郁夫 「〈帝国〉から蜂起へ：革命なき時代における政治思想の可能性を探る」、『Int'lecowk――国際経済労働研究』、1007巻、2010年、29-31頁

② 図書

- 齋藤純一（編）、風行社『政治の発見 3 支える 連帯と再分配の政治学』、2011年、295頁（分担執筆）
- 中野剛志（編）、ナカニシヤ出版『成長なき時代の「国家」を構想する ―経済政策のオルタナティヴ・ヴィジョン―』、2011年、408頁（分担執筆）
- 雨宮処凛（編）、角川学芸出版『反撃カルチャー ―プレカリアートの豊かな世界―』、2010年、282頁（分担執筆）

③ シンポジウム、公開講演会の開催

- 上智大学グローバル・コンサーン研究所公開シンポジウム「テーマパーク化される都市の公共性」2010年10月12日、上智大学

④ その他（学会発表、研究報告書の印刷等）

- 日本平和学会関東地区研究会「グローバル・ジャスティス運動の理論と課題」2010年12月6日、早稲田大学（学会発表）
- The Anthropology of Japan in Japan (AJJ) annual conference, “Third Wave of New Social Movement and Transnormative Culture”, 6, 11, 2010 Temple University（学会発表）
- カルチュラルタイフーン 2010「セカイからシャカイへ：再魔術化された〈日常〉と新たな社会的紐帯の発見」2010年7月4日、駒澤大学（学会発表）
- 社会思想史学会「政治哲学の現在」2010年10月23日、神奈川大学（討論者）
- 日本政治学会研究大会「政治哲学の現在――政治哲学と国際政治哲学の対話」2010年10月9日、中京大学（討論者）
- 図書新聞「来るべき公共性に向けて」2011年2月26日（書評）
- ニュースの深層「宮下公園問題から見る都市と公共性」2010年12月22日、CS放送局・朝日ニュースター